

落語 得手不得手

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大工見習いの佐吉は腕がいいのに、鉋だけは下手くそだった。その訳は……

目次

落語 得手不得手

1

落語 得手不得手

えー、秋風亭流暢しゅうふうていりゅうちやうと申します。

一席、お付き合いを願います。

ここで、お決まりの小話を一つ。

えっ！ ゆんべの台風で布団が飛んでったって？

そうなのよ、ふっとんだのよ！ 亭主の布団だけ。

ま、なんで亭主の布団だけなのか、その辺は、さて置きまして、台風には氣いつけてえもんですな。ついでに亭主まで吹き飛ばされる可能性がりますからね。

ま、亭主がどつかに吹き飛ばされて喜ぶ奥方も、中にやいるかもしれないが。

「クツ。台風と共に亭主まで去つちまつてさ、左遷させんみてえにド田舎にでも飛ばされちまつたかね？」
「台風と共に去りぬ」なんちやつて。クツ」

って、悲しんでんだか、喜んでんだか分かりやしねえ。

ま、何事も紙一重ではありませんが。

えー、季節柄、台風とは関係ねえんですが、でいく（大工）の話でして。

えっ？ 久しぶりの高座だなんて？

へ。小説の語りやらをちつとばっか頼まれてね、あっちこっち引つ張り風だったもんで。

本業のほうおろそが疎かになつちまって、ホント申し訳ねえ。

つてことで話を続けさせてもらいますが。

でいく見習いの佐吉には、どうしても巧うまくできねえことが一つありましてね。

「佐吉。何べん言つたら分かるんない。これを見ろ、ガタガタじゃねえか。なんで、真つ直ぐ平らに削れねえかな……」

「……わカンナイ」

「ツ。駄洒落だしゃれなんか言つてる場合じゃねえだろ」

「……すんません」

「金槌かなづち持たせても、鋸のこぎり持たせてもうめえのに、なんで鉋かんなだけは下手くそかね……」

「……わカンナイ」

「こんなデコボコじゃ、隣同士フィットしねえだろ？ 見ろ、隙間だらけじゃねえか」

「♪隙間だらけのテーブルをくをを……へえ」

棟梁とうりょうに叱られた佐吉はしよんぼりするつてえと、鉋を巧く使えねえのがよつぽど悔し

かったのか、恨めしそうに鉋の出っ歯を睨み付けた。

そんな時だ。母ちゃんの作ったうどんを食べてると、

「ほらよつ、これをかけるとうまいぞ」

母ちゃんが削り節をパラパラと散らした。

「アツ！ これだつ」

突然、佐吉がでつけえ声を上げた。母ちゃんは驚いた拍子に削り節を佐吉の頭にばら蒔いちまった。

「ビックリした。なんだよ、でっかい声出して。見ろ、お前にふりかけちまったじゃないか」

手ぬぐいで佐吉の頭の削り節を払った。

「なんで、カンナがうまくできねえか、理由が分かったんだよ」

「で、その理由って？」

「鰹節のせいだよ」

「鰹節がどうしたんだよ」

「あれは、おいらが八つの時だ。トビの父ちゃんが足場から落つこちて死んじまって、なんも食うもんがなくてさ。そんな時、鰹節を毎日毎日食わされたことがあつただろ？」

カンナで削るたんび、そのカンナくずが、鰹節の削つたのと似てつからさ。たぶん、そ

れがトラウマになってたんだよ」

「……そうだったね。鰹節ぐらいしか食うもんがなかったつけね。お前には苦勞かけたね」

母ちゃんは当時を思い出して、うどんと一緒に鼻水もすすった。

「苦勞なんて思っちゃいけないさ。ただ、カンナくずを見ると、死んだ父ちゃんを思い出しちまうんだよ。……たぶん」

「……そうだったのかい。すまなかつたね、お前の気持ちも知らないで、鰹節なんか削っちまって」

「いいってことよ、鰹節に罪はねえからな。ズルズル……。ん、うめえ」

「どれ、ズルズル……。うむ、ちつとぼつか薄かったかね？」

「なーに、おいらのは涙が一滴入って、いい塩加減よ」

「ズルズル……。あ、ホントだ。母ちゃんにも一滴入ったからいい塩梅だ」
あんばい

「ハハハハ」

「ムスコムスコ」

どうでい、いい親子じゃねえか。こちとらも泣けてくるぜ。グスツ。

えー、つてことで、不得手の原因を解明した佐吉だが、苦手だった鉋は克服できてつか？

「おう、うまくなったじゃねえか」

棟梁が感心した。

「死んだ父ちゃんが鯉節好きだったのを思い出して」

「……?」

ま、棟梁にはなんのことだかさっぱりだな。『^え得手^て不得手^{ふえ}』も読みようじゃ、何かを【^え得て、増えて】いくもんじゃねえのかなあ？ 何が増えるかは人それぞれだ。

つてえことで、不得手を克服するにや、まず、苦手意識の原因究明だ。そして次に、真相解明したら、それを得意分野に繋げるために、頭をプラス思考に切り替えるこつた。

なー、そうすりや、^{おの}自ずと道が^{ひら}拓け、不得手を克服できるつてえ寸法よ。

けど、そうは言つても、そんな理屈どおりにはいかねえつて。さつきも、苦手な師匠に叱られちまつてさ。

「おめえは、何べん言つても下手くそだな」

つて。どうせ高座のこつたろと思つたが、取り敢えず、

「何がですかい」

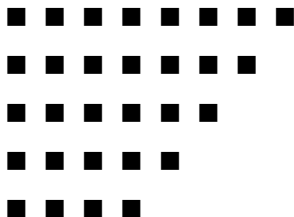
って訊いたら、

「決まってるんじやねえか、師匠の俺を立てんのが下手くそだつてえの」
って言うもんで、意味が分からねえでいると、

「最近、おめえのほう売れてんじやねえかよお、も〜」
って、子供みてえに駄々をこねましてね。

だから、演目をもじつて言つてやつたんですよ。

「師匠から良き落語を【得て、増えて】きたんですよ、良きお客様が」と。



幕

